

## 中国の日本語教科書の副詞的な表現に関する一考察 — 『新編日語』の中の副詞の例文を通して—

劉 時珍

### 要旨

中国の日本語教科書には例文が不自然なものが多いと言われている。しかし、どこが不自然か、不自然な原因は何かという研究はほとんどなされていない。本稿では、中国で出版されている『新編日語』という教科書の中の副詞の例文を調査データにし、副詞の使用が不自然になる場合について調査を行い、副詞の問題点を探った。

本研究では、調査を2段階、すなわち自然さに関する母語話者の判断という調査Ⅰと、不自然さの原因の究明という調査Ⅱに分けて行った。その結果、副詞を説明する例文は述語との共起関係に配慮しながら提示される一方、副詞と例文そのものとの間に文体上・意味上などの整合性の面で齟齬が見られ、副詞の例文の不自然さの原因になっていることが明らかになった。また、調査結果に基づき、どの副詞に特に文体上の問題が多いか、どの副詞に特に意味上の整合性が足りないかをまとめ、教科書の中の副詞についてタイプ別に問題点を考察した。

**キーワード：**日本語教科書、副詞、例文、文体上の整合性、意味上の整合性

### 1 はじめに

日本語学習者は日本語を話し、書くときに、文法上大きな間違いがなくても、唐突さや違和感があるとよく指摘される。日本語能力試験1級に合格し、文法や読解など高いレベルに到達しても、言語の運用能力、つまり、産出レベルが今一步である、という現状が海外の日本語教育における大きな課題であろう。どうすれば、学習者が体系立った言語知識が身につく、表現の統一感、文全体のバランス感覚をきちんと把握できるようになるのだろうか。その鍵は、教科書に掲載される例文の自然さが握っていると思われる。

教科書は、生の日本語に触れる機会に乏しい海外の日本語教育では日本語のインプットの土台といえる重要な存在である。中国で出版されている日本語の教科書は、中国の国情に合っていて、学習者が理解しやすい長所を持っている反面、例文が日本語として不自然であるとよく指摘される。中国の日本語学習者の学習スタイルは暗記中心であるため、例文の不自然さは日本語でのコミュニケーションに負の影響を及ぼしかねない。にもかかわらず、中国の教科書では、暗記する例文の自然さの検討が未だ欠けていると思われる。そのような現状のもとで、本稿は、1990年代に中国で出版され、中国全土の大学の日本語学部・学科で広く使われている日本語教科書『新編日語』を材料に、その中に掲載されている副詞の例文の不自然さとその原因を解明し、教科書の副詞的な表現の問題点を探ることを目的とし、調査を行った。

## 2 問題の所在

この節では、研究の目的に基づき、『新編日語』という教科書を選定した理由、さらに教科書の例文の中で調査対象を副詞に絞った理由を述べる。その後、本稿の具体的な研究課題を明確に記述する。

### 2.1 教科書の選定理由

本稿の目的は、中国で出版されている日本語教科書の中の副詞の問題点を探ることであるため、まず中国における日本語の教科書を選定することになる。『新編日語』を取り上げることにしたのは、主に次の3つの理由による。

第一に、『新編日語』が90年代から今に至るまで中国の大学でもっとも広く使われている教科書である点が挙げられる。2005年、北京日本学研究中心が作成した教材コーパスにも収録されている。『新編日語』の編集者周平(2004)が教科書の作成過程に関する論文で述べているように、中国の国情、教育方針に合致する教科書である。

第二に、編集者が中国の大学で日本語を学んだ典型的な学習者であり、自分の学習経験を生かし、導入の難易順序や中国語に馴染みやすい例文を提示している点が挙げられる。事実、中国人学習者向けの、日本語の理解をよりよく促す教科書として評価されている<sup>1</sup>。

第三に、例文が中国人学習者にとってわかりやすい反面、日本語としての自然さに欠けている点が挙げられる。その意味でも、『新編日語』は中国の典型的な日本語教科書である。

このように、『新編日語』は中国の大学の日本語教科書の代表作といえ、また現在中国の教育現場で活躍している多くの日本語教師が学んだ教科書でもある。その問題点の解決は、今後の中国の日本語教科書の作成に大きな意義を持っていると考えられるため、本稿では『新編日語』を調査資料として選択した。

### 2.2 副詞に絞る理由

本稿が調査対象を副詞に絞る理由は、中国人学習者にとって副詞が、特に習得上の高い関門になっているからである。河野(1994)によれば、中国人向け上級者教材の難しい語彙として考えられている84語のうち、副詞が45語で半数以上を占める。また、上級学習者に対しては、語彙の説明は「書き言葉」「話し言葉」の区別しかなされておらず、この区別に収まらない、かなり詳細で具体的な説明がさらに求められると指摘されている。

副詞は修飾語であり、実質語と機能語の中間に位置する。そのため、語彙的な性格に加え、陳述副詞に典型的に見られるように文法的な性格を持ち、文の前後の要素との関わりが深い。さらに、文体的に微妙なニュアンスを帯びることが多く、教科書の中で、そうし

---

<sup>1</sup> 『新編日語』に関する評価は、張(2005)も参照されたい。

た副詞の多面的な性格を明瞭に説明することがまだ十分にはなされていないと思われる。そのため、対象を副詞に絞って調査を行うことにした。

### 2.3 具体的な研究課題

ここで、あらためて本稿の具体的な課題を2つに大別する。

研究課題 1：教科書の副詞の例文が自然か否かを検討し、不自然な例文を多く生み出している副詞を抽出する。

研究課題 2：不自然な例文の副詞の原因を分析することによって、副詞の問題点がどこにあるかを考察する。

## 3 副詞の問題点に関する先行研究

日本語教育の立場に立ち、副詞の問題点に関する指摘がなされている先行研究として、小矢野（1984）、野田（1984）、石黒（2004）が挙げられる。

小矢野（1984）は、学習者のレベル毎に、副詞にどのような問題が存在しているか指摘している。また、野田（1984）は主として副詞同士の語順の問題についてルールをまとめたものである。さらに、石黒（2004）は中国人学習者を対象に、漢語副詞と和語副詞の類義表現に関する調査を行い、副詞の文体的な制約に注意すべきであると指摘している。

これらの先行研究を踏まえ、本稿は中国の日本語教科書で扱われている副詞でどのような問題が生じているか探ることを調査の焦点とする。

## 4 調査方法

調査は調査Ⅰと調査Ⅱという2段階に分け行った。その前の準備段階では、教科書の中から副詞の判定を行った。4-1では副詞の判定の基準、4-2では調査Ⅰと調査Ⅱの方法の妥当性の検討及び具体的な質問紙の構成について述べる。4-3では調査協力の日本語母語話者（以下「協力者」と呼ぶ）の内訳を記す。

### 4.1 副詞の判定

教科書の副詞の判定に関しては5つの国語辞典<sup>2</sup>を用い、副詞か否かを判定した。その結果、教科書に出て来る69種の副詞が抽出された。

教科書にある表現が副詞か否かについては、狭義の副詞だけでなく、副詞的な用法にも焦点を置き、判定を行った。まず、教科書の文型説明欄で副詞的な用法として説明されている副詞を全て取り出す。次に、前述の5つの国語辞典で副詞であるか否かを確認し、5

---

<sup>2</sup> 副詞の判定にあたって、5つの国語辞典、『新選国語辞典第八版』（2002）、『三省堂国語辞典第五版』（2002）、『集英社国語辞典第二版』（2000）、『新明解国語辞典第五版』（1998）、『岩波国語辞典第四版』（1988）を用い、調べた。

つの辞典のうち3つ以上で「副詞」と判定されているもの54種を抜き出した。最後に、『現代副詞用法辞典』(1994)において、また教科書で「副詞」と明示されているものを15種ピックアップした。以上の作業を行ったところ、合計69種になった。

## 4.2 方法の選定

今回の調査は、『新編日語』の中の全ての副詞69種の全ての例文282例を調査データにしたため、協力者にしてもらう作業量が非常に多い。調査量を考慮したうえで、調査方法については協力者に負担をかけすぎないようにかつ目的を達成するために、予備調査など試行錯誤を繰り返し、調査Ⅰと調査Ⅱの妥当性、信頼性が高いと思われる方法を工夫した。以下、具体的に調査方法を述べていく。

### 4.2.1 調査Ⅰの概要

調査Ⅰの方法選定にあたって、教科書の副詞の用法がはたして不自然か否かを判断するには、主として2つの方法が考えられる。まず、副詞の文を母語話者に自然さの判断をってもらう。つまり、副詞の例文に対して、「不自然」「やや不自然」「どちらともいえない」「やや自然」「自然」という5段階方式で選んでもらう方法がある。この方法は少量のデータを多くの人に判断してもらい、その傾向(自然か不自然か)を見るという調査に適しているが、今回の調査は大量のデータがあり、自然かどうかの判断に対して個人差が大きいと思われるため、5段階方式には無理があると判断した。第二に、具体的な例文を与え、自由にこの文に相応しい副詞を書き込むか、類義表現の中から適切な副詞を選んでもらう方法が考えられる。今回の調査では教科書の副詞が選べるかどうかチェックポイントなので、この類義表現の選択式にした。

調査Ⅰでは教科書の副詞の例文(282個)を全てピックアップしたうえで、教科書の副詞に類義表現<sup>3</sup>を4つ加え、選択肢の形で、教科書の例文に最も相応しい選択肢(複数可)を選んでもらうように質問紙を作成した。質問紙Ⅰは以下を参照されたい。

---

<sup>3</sup> 教科書の副詞に類義表現を選定する際、4つの辞典、『類語大辞典』(2002)、『分類語彙表』(2003)(増補改訂版)、『明鏡国語辞典』(2002)、『日本語基礎辞典』(1989)の中の類義表現を選び、また語彙専門家の意見を伺い、妥当性を検討した。



のである。以下の表 1 に示されている。その原因表に基づき、各協力者に、各自が調査 I で教科書の副詞を選ばなかった理由を選び、質問紙 II に記入してもらうように設定した。

表 1 文の不自然さに関する原因

副詞に問題あり										例文に問題あり		副詞にも例文にも問題なし		その他			
文法的に意味的におかしい				例文の意味から想像される文脈が場面、状況などと合わない					形態上の問題	<11>	<12>	<13>	<14>	<15>			
<1>	<2>	<3>	<4>	<5>	<6>	<7>	<8>	<9>	<10>	ある	想像しにくい	相対的に見て、最適な選択肢が別であったのでそれより若干劣ると考えた	再考の結果、△の副詞が最も相応しい選択肢(の一二)であった	その他			
れにくい	例文の意味から考えて、△の副詞は入	は入れにくい	例文の意味から考えて、そもそも副詞が悪い	△の副詞と共起する述語などとの相性が悪い	えればよくなる	△の副詞の位置がおかしい(語順を変えればよくなる)	副詞が硬い	副詞がくだけている	副詞が古めかしい	副詞が大げさ	副詞の語感が悪い	副詞の形がおかしい(「あまり」を「あまりにも」と直せばよくなる等)	副詞を除いた例文自体に文法的な誤りがある	例文が情報不足で文脈や場面・状況などが想像しにくい	相対的に見て、最適な選択肢が別であったのでそれより若干劣ると考えた	再考の結果、△の副詞が最も相応しい選択肢(の一二)であった	その他

### 4.3 協力者

協力者は 4 つの大学の大学院生、日本語母語話者 22 人に依頼した。そのうち、女性は 17 名で男性は 5 名であった。年齢は 20 代から 30 代に集中しており、それぞれ 20 代は 11 名、30 代は 9 名、40 代は 2 名である。出身地は関東地方が多く、15 名で、次いで東北地方は 3 名、甲信越地方は 2 名、東海と九州地方は各 1 名である。

## 5 調査 I の結果と考察

### 5.1 調査 I の結果

調査 I は研究課題 1 である教科書の副詞の例文が自然か否かを検討し、不自然な例文を多く生み出している副詞を抽出することを目的としている。調査 I を通して教科書の副詞の例文の全体像が見え、副詞を段階的に抽出し考察した。

表2 副詞の例文の判断結果<sup>4</sup>

No	副詞	例数	1	2	3	4	5	6	7	平均値	No	副詞	例数	1	2	3	4	5	6	7	平均値
1	一時に	22	21	21	-	-	-	-	-	21.33	37	いずれにせよ	14	5	3	2	-	-	-	-	6.00
2	どうのこうの	21	14	13	-	-	-	-	-	16.00	38	すこしも	12	6	3	3	-	-	-	-	6.00
3	一向に	19	16	12	11	-	-	-	-	14.50	39	さっそく	12	0	-	-	-	-	-	-	6.00
4	けっこう	22	11	10	-	-	-	-	-	14.33	40	単に	10	6	2	-	-	-	-	-	6.00
5	一口に	21	20	12	4	-	-	-	-	14.25	41	まるで(否定)*	9	7	5	3	-	-	-	-	6.00
6	近ごろ	20	7	-	-	-	-	-	-	13.50	42	一概に	6	6	5	-	-	-	-	-	5.67
7	もうすこしで	17	15	14	5	-	-	-	-	12.75	43	だいふ	9	7	5	5	2	-	-	-	5.60
8	別に	17	13	8	-	-	-	-	-	12.67	44	ぜんぜん	7	6	5	4	-	-	-	-	5.50
9	総じて	17	14	11	8	-	-	-	-	12.50	45	そう	6	5	4	-	-	-	-	-	5.00
10	だれもかれも	22	10	10	6	-	-	-	-	12.00	46	文字通り	9	4	1	-	-	-	-	-	4.67
11	なんとなく	20	16	9	1	-	-	-	-	11.50	47	すこしぐらい	5	5	3	-	-	-	-	-	4.33
12	とかく	17	15	13	8	2	-	-	-	11.00	48	なににも	13	2	1	1	-	-	-	-	4.25
13	まず	18	18	10	9	9	7	1	-	10.29	49	決して	8	3	3	2	-	-	-	-	4.00
14	なかなか	18	14	7	2	-	-	-	-	10.25	50	うっかり	7	1	-	-	-	-	-	-	4.00
15	なんと	14	13	10	4	-	-	-	-	10.25	51	あつという間に	6	6	4	0	-	-	-	-	4.00
16	このごろ	20	17	11	7	7	7	6	-	10.13	52	いくら	7	3	3	2	-	-	-	-	3.75
17	あまり(過度)	19	11	5	4	-	-	-	-	9.75	53	どうせ	11	2	1	0	-	-	-	-	3.50
18	もしかすると	19	11	4	3	-	-	-	-	9.25	54	必ずしも	6	6	1	1	-	-	-	-	3.50
19	どんなに(か)*	15	10	6	6	-	-	-	-	9.25	55	あまり	6	3	1	-	-	-	-	-	3.33
20	それほど	14	8	8	7	-	-	-	-	9.25	56	ずっと	12	5	4	3	3	3	2	-	3.30
21	とうてい	18	9	5	4	-	-	-	-	9.00	57	どうしても	6	3	3	2	1	-	-	-	3.00
22	そっくり	18	5	4	-	-	-	-	-	9.00	58	まさか	6	4	4	2	1	1	-	-	3.00
23	一時	17	16	5	3	3	-	-	-	8.80	59	さっぱり	5	3	1	-	-	-	-	-	3.00
24	とても(ない)	14	9	7	5	-	-	-	-	8.75	60	何だか	5	4	2	1	-	-	-	-	3.00
25	つい(時間)*	20	4	2	-	-	-	-	-	8.67	61	なるほど	3	3	-	-	-	-	-	-	3.00
26	なぜかというと	16	13	4	1	-	-	-	-	8.50	62	いかにも	6	4	3	1	0	-	-	-	2.80
27	どれだけ	11	6	-	-	-	-	-	-	8.50	63	めったに	5	4	1	0	-	-	-	-	2.50
28	さすがに	14	13	12	5	4	2	-	-	8.33	64	つい*	3	3	1	-	-	-	-	-	2.33
29	すぐ	15	7	6	5	-	-	-	-	8.25	65	どんなに*	4	3	1	0	-	-	-	-	2.00
30	道理で	13	9	2	-	-	-	-	-	8.00	66	いったい	3	2	1	1	-	-	-	-	1.75
31	ひよつとしたら	11	8	7	6	-	-	-	-	8.00	67	どうやら	5	0	0	-	-	-	-	-	1.67
32	なんとか	22	17	11	4	3	2	2	-	7.75	68	思わず	3	2	0	-	-	-	-	-	1.67
33	そんなに	9	8	6	-	-	-	-	-	7.67	69	いっぱい	2	1	-	-	-	-	-	-	1.50
34	だって	18	11	5	1	0	-	-	-	7.00	70	最近	2	1	-	-	-	-	-	-	1.50
35	さぞ	11	10	6	1	-	-	-	-	7.00	71	二度と	1	1	0	-	-	-	-	-	0.67
36	大して	10	6	6	3	-	-	-	-	6.25	72	まるで(比況)*	1	0	0	-	-	-	-	-	0.33
												-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

ここでは、調査 I の結果を表 2 のように、副詞を例文毎に教科書の副詞を選ばなかった人数を示し、平均値を計算し、その平均値の降順で副詞を並べた一覧表になっている。

教科書には一つの副詞に対して大体 3 つ、4 つの例文が提示されている。表 2 を見ると、教科書の副詞の例文を協力者に判断してもらった結果として、教科書の副詞に問題がある

<sup>4</sup> 表中の「例数」は、教科書の中に副詞を説明する時の例文の数を指す。また、「\*」をつけた「どんなに」「つい」「まるで」は 2 回ずつ計算し、72 種になったが、副詞として 69 種である。

と思われる副詞もあれば、問題がなさそうな副詞もあるように思われる。とりわけ、問題があると思われる副詞には、副詞の全ての例文が不自然だと判断される副詞もあれば、同じ副詞の中で例文の自然さのバラツキがある副詞も存在することが分かった。

## 5.2 調査 I の考察

次では、表 2 の副詞を 3 段階に分け、それぞれ「習得が困難な副詞」、「習得がやや困難な副詞」と「習得が容易な副詞」というカテゴリにまとめ、考察をした。

### 5.2.1 習得が困難な副詞

調査 I の結果に従い、副詞 69 種のうち、不自然な文が多く (表 2 中の「平均値」が「11.00」以上の副詞)、または例文のバラツキが大きい (同じ副詞の中に自然な例文もあれば不自然な例文もある) 副詞を習得が困難な副詞として抽出した。全部で 24 種あった。

一時に・どうのこうの・一向に・けっこう・一口に・近ごろ・もうすこしで・別に・総じて・だれもかれも・なんとなく・とかく/まず・なかなか・このごろ・あまり (過度)・もしかすると・とうてい・そっくり・一時・つい (時間)・なぜかというと・なんとか・だって

\* 「/」以降の 12 種の副詞は平均値が 11 以下だが、例文のバラツキが大きいとされるものである。

上記の副詞を見ると、たとえば、「一時に」「とかく」「なかなか」などの多義の副詞が多いことと、やや硬い副詞の集まりということが分かった。ここでは、紙幅の関係で具体的な例文は示せないが、例文からこれらの副詞は主として意味的、あるいは文体的な制約が無視されているように覗かれる。具体的な考察は後の 6.2 で行う。

### 5.2.2 習得がやや困難な副詞

習得がやや困難な副詞とは、習得が困難な副詞を除く、「平均値」が「5.00」以上の副詞である。全部で 21 種あった。順序は表 2 の順による。

なんと・どんなに (か)・それほど・とても・どれだけ・さすがに・すぐ・道理で・ひよっとしたら・そんなに・さぞ・大して・いずれにせよ・すこしも・さっそく・単に・まるで (否定)・一概に・だいぶ・ぜんぜん・そう

これらの副詞を見ると、感嘆の意を表す陳述副詞、たとえば「なんと」「どんなに (か)」「どれだけ」などと、「とても」「すこしも」「まるで」のような強否定の陳述副詞が多いことが分かった。また、やや硬い副詞、たとえば「さぞ」「いずれにせよ」「単に」なども多少入っていた。

### 5.2.3 習得が容易な副詞

習得が容易とされる副詞とは、表 2 中の「平均値」が「5.00」未満の副詞である。全部で 27 種あった。順序は表 2 の順による。

文字通り・すこしぐらい・なにも・決して・うっかり・あっという間に・いくら・どうせ・必ずしも・あまり・ずっと・どうしても・まさか・さっぱり・何だか・なるほど・いかにも・めったに・つい・どんなに・いったい・どうやら・思わず・いっぱい・最近・二度と・まるで（比況）

これらの副詞を見ると、よく日常会話に使われ、陳述副詞が多いことがわかった。学習者にとって分かりやすい副詞のカテゴリともいえる。

上記の副詞を見ると、「なにも」「決して」「あまり」のような否定の陳述副詞と、「いかにも」「まるで（比況）」のモダリティとの関わりがある陳述副詞が多いことが分かった。

## 6 調査Ⅱの結果と考察

### 6.1 調査Ⅱの結果

調査Ⅱは、研究課題 2 である不自然な例文の副詞の原因を分析することによって、副詞の問題点がどこにあるかを考察することを目的とする。結果は主に 2 つに分け記述する。協力者が教科書の副詞を選ばなかった理由を選んだ結果により副詞の問題点を概観し、また調査Ⅰに抽出された習得が困難な副詞の具体的な制約をまとめた。

#### 6.1.1 副詞の問題点の概観

調査Ⅱでは協力者に教科書の副詞を選ばなかった理由を選んでもらった。その結果を全体的に見ると、副詞の問題点として、まず文体上の整合性に欠ける点が挙げられる。特に例文に比して副詞が硬いことが多かった。次に、副詞の意味上の整合性については、副詞と文の意味が合わないという項目の得点が高かった。そして、文法上、述語との整合性が欠けることは少なかったが、文の他の副詞などとの、修飾成分の間に齟齬が見られた。

次の表 3 では、教科書の副詞を選ばなかった人数を 5 段階に分け、段階毎に副詞を選ばなかった理由の各項目の平均値を取った上で、6 つの上位のカテゴリに小計してある。

表3 副詞の原因に関する概観

	意味	文法			文体					形態	例文自体		相対	合計
	〈1〉 文の意味と合 わない	〈2〉 副詞が 入れに くい	〈3〉 述語等 との共 起問題	〈4〉 副詞の 語順	〈5〉 副詞が 硬い	〈6〉 副詞が くだけ ている	〈7〉 副詞が 古めか しい	〈8〉 副詞が 大き さ	〈9〉 語感が 悪い	〈10〉 副詞の 形の問題	〈11〉 例文に 誤りがある	〈12〉 例文が 情報不 足	〈13〉 相対的 に劣る	
22～21人	10.1	0.38	1.5	0	1	0.13	1	1.13	1.63	0.13	0.13	0.75	4	21.88
計	10.1	1.88			4.89					0.13	0.88		4	21.88
比率	46%	9%			22%					0.60%	0.40%		18%	100%
20～16人	4.4	0.84	1.56	0.04	1.04	0.2	0.36	0.28	0.68	0.6	0.28	2.88	3.92	17.08
計	4.4	2.44			2.56					0.6	3.16		3.92	17.08
比率	26%	14%			15%					3.50%	18.50%		23%	100%
15～11人	1.74	0.32	0.79	0.11	0.68	0.24	0.45	0.21	0.63	0.61	0.37	1.63	3.16	10.94
計	1.74	1.22			2.21					0.61	2		3.16	10.94
比率	16%	11%			20%					5.50%	18%		29%	100%
10～6人	0.59	0.07	0.35	0.03	0.55	0.38	0.35	0.19	0.39	0.14	0.06	0.94	1.87	5.91
計	0.59	0.45			1.86					0.14	1		1.87	5.91
比率	1%	7.60%			32%					2.4	17%		32%	100%
5～1人	0.11	0.05	0.13	0	0.22	0.13	0.05	0.05	0.1	0.07	0.01	0.45	0.67	2.04
計	0.11	0.18			0.55					0.07	0.46		0.67	2.04
比率	5%	8.80%			27%					3.40%	22.50%		33%	100%

表3は、教科書の副詞を選ばなかった人数によって、副詞の不自然さの原因がどう分布しているかを示している。具体的には、人数を5つのランクに分け、各ランクの副詞の不自然さの原因がどこに集中しているかがわかるように一覧表にしてある。

たとえば、22人～21人のランク、すなわち、ほとんどすべての人が教科書の副詞を選ばなかった例文には8文ある。この8文について、それぞれ1文ずつ教科書の副詞を選ばなかった原因を調べ、原因項目毎に合計し、8で割って平均値を求めると、表のような「10.1」人、「0.38」人、「1.5」人という数字になる。また、これらの数字を横に足すと合計21.88になる。なお、この表では、原因の「〈14〉再考の結果、適切な選択肢である」と「〈15〉その他」を略しているため、〈1〉～〈13〉まで足しても21.88ではないことがある。

表3全体のデータを見ると、副詞の「意味上」の問題は、22～21人の場合の得点が最も高かったが、人数が少ない場合はあまり問題になっていない。一方、「文体上」の問題として、人数の段階性に拘わらず、普遍的に得点が高いことに注意する必要がある。また、「文法上」の得点は全体的にそれほど高くはなかった。因みに、表3の「例文自体」と「相対」という上位カテゴリは教科書の副詞を選ばなかった理由にはなるが、副詞の問題ではないため、考察を省いた。ただし、「相対」で人数が多い場合は、不自然な原因が不明確なために「相対」が選ばれたと考えられ、実際には別の原因が潜んでいる公算が大きい。

### 6.1.2 習得が困難な副詞の制約の究明

6.1.1 では、教科書の副詞の全体の問題点を探ってみた。次に、調査 I では抽出された習得が困難な副詞は原因表の上位カテゴリ「意味」「文法」「文体」「形態」毎に、どこに得点が高いかを平均値を取り、具体的にどの制約が強いかについて、表 4 に示した。

表 4 習得が困難な副詞の制約別の得点

No	副詞	意味	文体	文法	形態	No	副詞	意味	文体	文法	形態
1	一時に	8.67	5.67	1.67	0	13	まず	0.57	0.29	0.14	0
2	どうのこうの	5.00	1.67	0.67	0	14	なかなか	1.75	0.00	2.50	0
3	一向に	2.25	3.25	1.50	3.50	15	このごろ	2.25	1.38	0.75	0.13
4	けっこう	6.33	0.67	2.33	0	16	あまり(過度)	1.50	2.25	1.25	3.00
5	一口に	5.00	2.00	0.75	0	17	もしかすると	0.50	1.25	0	0.50
6	近ごろ	5.00	1.50	2.50	0	18	とうてい	1.00	3.75	0.50	0
7	もうすこしで	1.50	2.00	4.00	0	19	そっくり	1.00	2.67	0.33	0.33
8	別に	1.67	2.00	0.33	0	20	一時	2.00	0.60	0.00	0
9	総じて	1.75	4.25	2.00	0	21	つい(時間)	4.67	1.00	1.33	0
10	だれもかれも	2.25	6.25	0.00	0	22	なぜかという	0	3.50	1.25	0
11	なんとなく	3.00	0.25	1.50	0	23	なんとか	2.75	0.13	1.00	0.38
12	とかく	3.40	2.00	1.20	0.60	24	だって	0.80	0.60	2.20	0

表 4 は、習得が困難な副詞がそれぞれどの制約に特に問題があるかを明らかにしたものである。例えば、「1. 一時に」は教科書の例文が 3 文あるとする。それらの例文について協力者が「一時に」を選ばなかった場合はその理由を原因表の 15 項目から選んでもらう。その上で、15 項目を「意味上」「文法上」「文体上」「形態上」「例文自体」「相対」という 6 つの上位カテゴリにまとめ、項目毎に足したものを 3 で割り、平均値を求めた。その結果、表の中の数字の高いカテゴリ、たとえば「一時に」で言えば、「意味上」と「文法上」に問題が集中していることがわかる。

表 4 のデータを見ると、「意味上」の制約の得点が高いものには「一時に」「けっこう」「どうのこうの」「一口に」「近ごろ」「つい」などが挙げられる。「文体上」で特に得点が高い副詞は「だれもかれも」「一時に」「総じて」「とうてい」などが挙げられる。「文法上」の制約が強い副詞として、「もうすこしで」「なかなか」「近ごろ」「けっこう」などが挙げられる。「形態上」の問題がある副詞は少ないが、「一向に」(「に」が抜けている例がある)と「あまり(過度)」(「にも」がないと過度の意味に受け取りにくい)が挙げられる。

因みに、表 4 の No13~No24 の副詞は例文のバラツキが大きいものなので、各カテゴリの平均値が低くなっているが、その中の高い得点のカテゴリは特に制約があると考えられる。

### 6.2 調査 II の考察

調査 II の結果に基づき、また同じ副詞における自然な例文と不自然な例文の違いを比べ

ることにより、副詞の問題点を「意味上」「文体上」「文法上」の順に考察を行う。

なお、形態上の制約については、特に問題が多くないため、考察の対象にしなかった。

### 6.2.1 意味上の問題の考察

今回の調査結果から、副詞自体と例文全体の意味の間に齟齬が生じていることがわかった。「一時に」「けっこう」「どうのこうの」「一口に」「つい(時間)」などが挙げられる。

例えば、以下の(1)では、副詞「けっこう」の意味と、「まだ時間があるから、～間に合いますよ」という例文全体の意味に齟齬が生じている。

(1) まだ時間があるから、歩いて行ってもけっこう間に合いますよ。

「けっこう」には「予想に反してかなり程度が高い」という意味があり、それが因果関係「から」に表れる「予想通り」の意味と矛盾を来し、不自然になってしまうのである。副詞を、「予想に反して」の意味が出ない「十分」にすれば、例文は自然になる。

また、(2)は「どうのこうの」の例文である。(2)では、「こまかく説明している」のポジティブな含意と「どうのこうの」のネガティブの含意が合わず、不自然さが生じている。

(2) 鈴木さんはいま料理の作り方についてどうのこうのとこまかく説明しているところです。

「どうのこうの」は、言葉数は多いが建設的でない繰り返し言に使われる表現である。そうしたネガティブな含意が出にくい「あれこれ」にすれば、不自然さはかなり減少する。

意味上の微妙なニュアンスの把握は、非母語話者には難しい。そこで、副詞の意味上のカテゴリを下位分類し、肯定的・中立的・否定的のような副詞の評価的な特徴を明示することが、そうした微妙なニュアンスを習得するためのヒントになると考えられる。

### 6.2.2 文体上の問題の考察

今回の調査では、『新編日語』の例文に文体上の問題があることが明らかになった。特に問題があったのは「だれもかれも」「一時に」「総じて」「とうてい」などである。

具体的な問題として、硬い副詞は日常会話の文に使われるため、文のバランスが崩れてしまうことが多い。例えば、以下の(3)の「総じて」の例は、硬い書き言葉の「総じて」と、くだけた話し言葉「よ」が共存することで、例文が不自然になっている。

(3) 総じて言えばあなたのいまの能力では、とてもかれらにおよばないよ。

教科書の解説にこの副詞が文章語か口頭語への言及があるが、しかし、当該の副詞がどのようなジャンルの文章によく使われるか、副詞の硬さはどの程度なのか、明確な記述が求められる。それは、コーパスを利用しジャンル別に副詞を調べ、くだけた文と硬い文を示す指標に着眼する必要がある。たとえば、文末の指標「よ」「ね」の文に、どのような副詞が共起しにくいのか、硬い「である」体の文にどのような副詞がよく出てくるかを調べ、それを提示することで、学習者はより具体的なイメージを掴むことができると考えられる。

### 6.2.3 文法上の問題の考察

今回のデータから『新編日語』でも副詞を提示する際、述語との共起関係をマーカーにし、説明されていることがわかる。それは副詞の習得の大きな鍵になっている。

一方、今回の調査により明らかになったのは、副詞が修飾成分であることから、述語以外の他の成分との相性の問題があるということである。つまり、副詞と副詞の間の程度のズレや、他の形容詞との共起制限があることが分かった。例えば、このような例文がある。

(4) 今学期習ったものは一応復習しましたから、試験はまず安心だ。

この文の中に、「一応」と「まず」2つの副詞の表している程度に差があるため、不自然さを覚える。そうした制限は学習者にとって把握しにくいと思われ、今後大量のデータにより、どの語とよく同時に使われているかについて具体的な数字を出すことが、教材作成や現場での教育に効果のあると思われる。

## 7 終わりに

本稿では、中国で出版されている日本語教科書『新編日語』を調査資料にし、その中の副詞の例文を分析し、副詞の問題点を考察した。結果として、副詞の提示の際、意味的整合性、文体的整合性、文法的共起関係などの面で、副詞と例文そのものとの間に齟齬が見られ、それが不自然さの原因になっていることが明らかになった。

今後の課題としては、個々の副詞の各制約について、ジャンル別のコーパスなどを利用することによって明確にし、その説明の仕方を検討することが必要である。それを明らかにすることが、学習者が自然な副詞の例文を産出することに繋がると考えられる。

## 参考文献

- 石黒圭 (2004) 「中国語母語話者の作文に見られる漢語副詞の使い方の特徴」『一橋大学留学生センター紀要』第7号、一橋大学留学生センター、pp.3-13
- 河野美抄子 (1994) 「中国人向け上級者教材の語彙」『日本語・日本文化研究』第12号、京都外国語大学留学生別科、pp.14-24
- 小矢野哲夫 (1984) 「副用語の指導上の問題点」『日本語教育』52号、日本語教育学会、pp.7-18
- 周平 (2004) 「『新編日語』について考える」『日本学研究』第13期、北京日本学研究中心、pp.65-76
- 張利平 (2005) 「中国における日本語教育の概観」松岡弘・五味政信編著『開かれた日本語教育の扉』スリーエーネットワーク、pp.241-255
- 野田尚史 (1984) 「副詞の語順」『日本語教育』第52号、pp.79-90
- 飛田良文・浅田秀子 (1994) 『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- 周平・陳小芬編 (1993) 『新編日語』上海外語教育出版社

(りゅう じちん 言語社会研究科博士課程)